

平成 21 年 5 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520565
 研究課題名（和文）近代イギリスの地域イベントにみる本国社会と帝国の多面的相互関係に関する研究
 研究課題名（英文）The Research of the Local Events in Modern Britain and Multilateral Relationship between the Home Country and the Empire
 研究代表者
 川本 真浩（KAWAMOTO MASAHIRO）
 高知大学・教育研究部人文社会科学系・准教授
 研究者番号：20314338

研究成果の概要：20世紀初頭のイギリスで開催ブームが起こったパジェントとよばれる野外歴史劇は、地元住民の手によって地元の歴史を劇形式で演じるという地域イベントであった。本研究は、この地域イベントをとおして当時のイギリスの地方都市の社会構造やその特性が様々にみとれること、さらに運営面でも内容面でも地元主体のイベントでありながら、本国社会と海外帝国というグローバルなレベルの関係が様々な形で取り結ばれ、表現されていたことを解明した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	300,000	2,500,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：西欧史

1. 研究開始当初の背景

これまでに、本研究の研究代表者は、ロンドンでの博覧会の歴史的変容や帝国プロパガンダとしての特性について、あるいは地方都市 マンチェスタやリヴァプールなどでの博覧会などについて研究をすすめてきた。ただ、それら博覧会を地域イベントとしてとらえ、かつそこから見通せるネイションや帝国との関係性について、十分に究明できていない部分があった。

さらに、同様の地域イベントとしてときに博覧会と併催されることもあったパジェントについては、博覧会よりもはるかに研究が手薄であった。とくに歴史学 イギリ

ス近現代史研究 の成果としては、フランク・ラッセルズによるパジェントを扱った D・S・ライアンの論稿 (D.S.Ryan, 'Staging the imperial city: the Pageant of London, 1911', in F. Driver and D. Gilbert, (eds.), *Imperial Cities: Landscape, Display and Identity*, Manchester, 1999, など) や、イングリッシュネスと歴史観の問題を扱ったなかでパジェント・ブームに触れた P・リードマンの論稿 (P. Readman, 'The Place of the Past in English Culture c.1890-1914', *Past and Present*, 186 (2005)) などがある程度であった。

こうした研究状況をふまえて、従来の研究

ではともすれば軽視されたり断片的にしかならなかつた地域イベントを主たる対象として、そこから近代イギリス社会の構造や力学の特性をあぶりだし、さらに本国、ネイション、帝国が取り結ぶ多面的な相互関係を解明するような研究を進展させるべく構想を練ったのが本研究である。

2. 研究の目的

本研究では、19世紀第4四半期から第一次世界大戦勃発までの間にイギリス国内の諸都市で開催された地域イベントのなかからとくに博覧会とパジェントに着目し、各都市での地域イベント開催に至る経緯やその前後の状況を把握し、分析することをとおして、次の2点を明らかにすることを目的とした。ひとつめは、当該時期のイギリス国内諸都市の政治・経済・文化など諸局面の特性ひいては当時のイギリス社会の特性、ふたつめには、本国社会と帝国との多面的な相互関係である。それらを明らかにする過程あるいはその展開する先には、帝国システムないし帝国外を含む世界システムとも重なり合いながら展開・変容してきた人、モノ、情報のネットワーク、市民意識、ナショナル・アイデンティティ、帝国意識といった心性にも迫りつつ、ロンドンよりもむしろ地方都市に重点を置いた、新たな地域イベントの歴史博覧会史ないしパジェント史研究を構築することを展望できるものであった。

3. 研究の方法

研究の方法は、主として、文献史資料を収集、整理して、その内容を精査、分析し、考察を進めるやり方を採った。書籍・論文等おおかたの文献は日本で購入したが、日本では入手困難な文献及び一次史料等については、2007年2～3月(ロンドン)、2008年2～3月(ロンドン)および同年6月(ファナム、ドーヴァー)にイギリスに出向いておこなった史料調査で閲覧・現地視察・入手した。以下、年度をおって解説する。

2006年度は、研究に用いる史資料収集とその整理を主な作業とした。とくに近代イギリス史や帝国史、あるいは博覧会やパジェントに関わる文献のみならず、博覧会会場でパジェントが行われた事例を意識しながら、同様の併催イベントとしてのスポーツ大会にもいくらか視野を広げて史資料収集をおこなった。2007年度は、まず前年度に収集した史資料によって把握できた先行研究や同時代史料等の状況、研究期間や経費の事情に鑑みて、とくにパジェントに研究対象を絞りこむことが研究実施期間内にもっとも効率的によりよい成果が得られると判断

した。そして、第一次世界大戦前の10年間にイギリス各地の都市で開催されたパジェントについて、開催地の当時の政治・経済・文化状況及びパジェント開催をめぐる議論や言説にかかる分析及び考察を進めた。2008年度には、それらの総括にとりかかったが、当該研究対象にかかる史料の残存状況や、分析及び考察に関連する議論が予想以上に多岐にわたり、当初は想定し得なかつた新たな課題も見つかった。それでも、以下に記した「研究成果」及び「主な発表論文等」のとおり、所期の目的に沿った一定の研究成果をまとめることができた。

4. 研究成果

本研究の成果は、以下に述べる3つの部分に大きくまとめることができる。最初に20世紀初頭のイングランドにおけるパジェントとそのブームを概観する。次いで、本国社会のなかでも開催地である都市社会に焦点を合わせて、そこでのパジェントという地域イベントの意味と逆にパジェントから見通せる都市社会のありようを考える。そのうえで、パジェントにかかる帝国の存在と表象に着目し考察することをとおして、本研究の主題である「本国社会と帝国の多面的相互関係」に迫る。

(1) 20世紀初頭のイングランドにおけるパジェント・ブーム

1905年6月、イングランド西部ドーセットの小都市シャーボーンで野外歴史劇「シャーボーン・パジェント」が上演された。このイベントは町の開基1200周年を記念する行事で、劇作家ルイ・N・パーカーが制作し、準備から上演まで文字どおりの住民総出で催された。この成功を契機にパジェント開催ブームがイングランドじゅうに広がったのである。

同時期に各地で盛んに開催されていた博覧会と同様、この時期のイングランドにおけるパジェントにも統一的な開催基準や一定の合意はなかつたので、おおよそシャーボーン・パジェント及びウォリック・パジェント(1906年)と同程度の規模と内容を条件にして探る(拙稿(2007年)執筆後に確認できたものも算入する)と、概数ではあるが、1907年には7、1908年以降第一次世界大戦勃発までの各年にもおおよそ5前後の数のパジェントがイングランド(およびウェールズやスコットランド)で確認できる。

各地で開催されたパジェントにはシャーボーンで行われた「パーカー流のパジェント」に倣ったイベントが多かった。その基本的な特徴は、都市エリート層とその人脈に

連なる人びとを中心に構成されるアドホックな組織が企画・運営したこと、衣装や道具類の製作者ないし出演する役者をも含めて実働人員の大多数が地元の住民であったこと、開催地の史実や伝承（ないしそれらを基に創作・脚色された話）が時代順に演劇の形態をとって演じられたこと、開催費用は自治体財政ではなく住民による出資金と債務保証で賄われたことなどである。

人口約6000人のシャーボーンについて、パジェントの出演者約900人のほかに道具類の製作・調達に関わった者やそれら関係者の家族の数まで考えに入れると、このイベントの地元社会へのインパクトは無視できないものであったと言える。その後の各地でのパジェントでも、都市内のさまざまなアソシエーション、学校など教育機関、あるいは都市当局が開催事業に関与することによって、多くの住民がイベントに関わるようになった。多くのパジェント準備に際して、地元の女性が「自発的」に無給ないし名目ばかりの手間賃程度で衣装の製作に携わった。さまざまな物資を調達したり宿泊・飲食にかかるサービスを提供したりする商工業者は、パジェントをビジネスチャンスと考え、また実際にその恩恵に浴することになった。また、ドーヴァー・パジェント（1908年）の場合、地元で発行されていた新聞は報道スタンスの差異はあったものの、政治的志向性や日頃の同業者間の中傷合戦などには関わりなくパジェント開催にはいずれも賛同する基本姿勢で一致していた。むしろ、そうした地元紙記事が伝える「町全体がパジェント一色に染まった」かのような印象をそのまま受け入れるわけにもいかない。開催事業にかかる不平や不信感も町の中に確実に存在した。ドーヴァーのように開催事業の赤字はいっそうの不評を買う原因にもなった。それでも、イベントへの関与の仕方が異なるため、博覧会よりはパジェントのほうが「直接に関与した」という感覚をより多くの人を抱いたであろう。パジェント開催地の多くが博覧会開催地よりも規模の小さな都市や町であったことも、たんに人的・物的資源の問題だけでなく、イベントと地元住民の関わり方の点から考えても興味深い点である。

さらに、パジェント開催には、「地元の歴史」を知るという「教育効果」が期待され、さらに「愛郷心」の涵養という後者はパーカー自身が明言した意図が込められていた。しかも、その「地元の歴史」は「イングランドの歴史」ないしその伝承とも重ね合わされた。1905年から1914年までのパジェントのエピソードで扱われた出来事や人物の時代を世紀単位で集計したところ、16世紀と17世紀が最も多く、ついで11～

15世紀、さらに1世紀と10世紀がそれに続く頻度であった（拙稿（2007年））。ウィリアム1世、ヘンリ8世、エリザベス（1世）など有名なイングランド王が登場したり、地元社会（ないし開催場所付近）を舞台にした古代ローマ支配下のブリテンや中世から近世にかけてのイングランド国内の動乱（バラ戦争や17世紀の内戦など）の様子が描かれたりすることが多かったことも確認できる。ただし、「イングランド史上、有名な人物や出来事」を利用しながら、むしろ「地元の先人たち」を中心に据えたストーリーが目につくことにも注意を要する。たとえば、ワイト島パジェント（1907年）やベヴェンジー・パジェント（1908年）にみられる、16世紀末のスペイン無敵艦隊の襲来（危機）を主題とするエピソードではたとえばドレイクなどの有名な人物ではなく、応戦体制を築く町の人びとが主役であった。また、オクスフォード、ロムジー、コルチェスタ、ヨークなど多くのパジェントで演じられた17世紀の内戦（王党派と議会派の戦い）に関するエピソードでも、各都市での戦いやチャールズ1世の幽閉や護送を描くなかでのそれぞれの町や地域の有力者や住民のプレゼンスが大きかったのである。

（2）イギリス本国社会のなかでのパジェント

パジェントから見通せる本国社会と帝国のありようを考える前に、多くのパジェントが都市イベントとして開催されたことに鑑みて、このイベントないしそのブームを支えた都市社会の構造ないし力学を把握しておく必要がある。その際に考察の枠組みを与えてくれるのが、都市における中産階級のプレゼンスや都市ガヴァナンスに関する議論である。サイモン・ガンなどによる先行研究に拠れば、ピークと目される時期の前後や程度の差があるとはいえ、おおむね19世紀後半から20世紀初頭にかけて、イギリスの地方都市における中産階級を主体とする都市エリートはさまざまなイベントをとおしてその権威や優位を誇示し、またそのことによって当該都市のガヴァナンスを確実なものとし、顕示し、維持しようとしたという（R.J. Morris and R.H. Trainor (eds.), *Urban Governance: Britain and Beyond since 1750*, Aldershot, 2000, ほか）。まさしくパジェントもそうした都市エリートの活動と深く関わっていた。

開催都市の内部でのパジェント開催体制のなかで重要であったのが、都市にあったさまざまなアソシエーションである。ドーヴァー・パジェントの場合も、商業会議所やその他の同業者団体ないし各種クラブなどが組織としてパジェントの企画・運営主体に委員

を出すことで都市イベントの開催体制が整えられた。さらに、ドーヴァー・インスティテュートという団体には、パジェントのなかのひとつのエピソードを割り当てられ、その構成員が同エピソードを演じるようになった。この団体は1852年にドーヴァー労働者インスティテュート Dover Working Man's Institute として発足したもので、同時期のイギリスに多く見られた、労働者を対象とする教育及び「合理的」娯楽の機会を提供する団体である。そのような形でのアソシエーションの直接的関与もパジェントの都市イベントとしての特徴を表すものであった。

他方、パジェントをめぐる開催都市と他都市との関係性も興味深い。その関係のありかたは、先例となる都市見倣い、また助けを受けることもある先例と批判的に参照すべき先例があるとの関係、周辺都市との友好的な協賛関係、同時期にパジェントを開催する都市との競争関係が想定される。ドーヴァーの場合、次のような状況であった(拙稿(2009年))。まず、同じパーカーによるパジェントを開催した都市前年がベリ・セント・エドマンズ、翌年がコルチェスタとの連携があり、イベント運営にかかる事務的・技術的事項から、道具類や設備資材まで、ソフト、ハードの両面での協力関係がみられた。また、後援確保、宣伝依頼、開幕行事への市長などへの参加依頼などの形で周辺都市との協調関係にも意が配られた。ドーヴァー・パジェントのパトロン・リストには多くの市長が名を連ねただけでなく、開幕日にはロンドン市長(ロード・メイヤー)を主賓として、国内から二都市の市長とベルギーからヘントとアントウェルペンの市長を招いて午餐会が催された。正装の市長たちによるパジェント会場までの行列に象徴されるように、これら市長の集合は、同イベントがシティ(ロンドン)をはじめとする多くの都市のその権威や正統性をともなった後ろ盾を得ていることを目に見える形で表現するものであった。他方で、いわゆるパーカー流のパジェントではない形態の先例を批判的にとらえたり、同年開催の競争相手に対する優位を主張したりするような言説も地元紙にみいだせる。地方都市での博覧会にみられたような「入場者数競争」はなかったものの、ライヴァルとみなされる都市との対抗関係はパジェントの成否ひいては開催都市の威信にかかわる重要事項であった。

このようなことから、地元でのイベント開催に関して、いっぼうで都市内の組織的関与による開催体制を固め、他方で都市外からの協賛を獲得し、その権威をも援用することで、都市エリート層がパジェントを都市の威

光や繁栄を内外に示す契機として活用しようとしたことがわかる。その前提となった都市社会の構造や政治力学、ガヴァナンスのありようは、次に述べる帝国との多面的相互関係にも深く関わるものである。

(3) パジェントにみる本国社会と帝国との多面的相互関係

パジェントは、開催地の歴史を演じる歴史劇であった。イングランド史上、有名な人物や出来事が登場するものの、物語の舞台はあくまで地元の町(あるいは町ができる前の同地付近)であり、登場人物の多数を占めたのは名を残している人にせよ、無名の人びとにせよそれぞれの時代に生きたその土地の人びとがであった。「イングリッシュネス」ないし「イングランド人としてのアイデンティティ」とパジェントとの関係は慎重に考えなければならない。そして、むしろそれは逆の意味で、帝国との関係にも注意を要する。

多くのパジェントで一七世紀までの歴史に焦点が絞られ、その後の「帝国拡大の歴史」が描かれることがほとんどないと指摘する先行研究もある(P. Readman, op.cit.)。しかし、それは的外れな指摘であることが本研究で確認された(拙稿(2007年))。イングランドで開催された「地元」の歴史を描くパジェントの内容が「イングランドの歴史」と重なることは比較的理解しやすい。むしろ、そうしたパジェントに具体的かつ意図的に「帝国」の表象が組み込まれたことのほうに重要な意味があると考えべきである。

シャーボーン・パジェントはそもそも町の開基1200周年記念行事として発案されたが、ドーセット内陸部の農村地帯にあったこの小都市の歴史をたどる行事にさえ、帝国とのつながりを示す表象や言説が多く登場する。たとえば、最後のエピソードの主人公は、北アメリカでの植民地建設に深く関わったサー・ウォルター・ローリーである。彼は、エリザベス1世からシャーボーン城とその所領を与えられ、邸宅(同地に現存する new castle)を建設した人物でもあった。パジェントでは、イングランドにタバコをもたらしたという「伝承」に基づいた場面などが演じられた。ローリーのエピソードはまさしく「町の歴史」として演じられたものであるが、それでもパジェントを構成する11のエピソードの最後に旧植民地(帝国)の展開に関わるストーリーが登場したことの意味は軽視できない。もうひとつは町そのものとアメリカ三植民地とのもっとストレートな歴史的關係に由来する。パジェント開催準備中の1905年2月に、アメリカ合衆国マサチューセッツ州シャーボーンから、同地に最初に入植した人物について問い合わせる書簡が届いた。このやりとりをきっかけとしてパ

ジェント開催の話がアメリカ側に伝えられた結果、パジェント上演時には、アメリカのシャーボーンから届いた祝辞が読み上げられ、イングランドのシャーボーン(母)とアメリカのシャーボーン(娘)が立ち並ぶ場面があった(C.P. Goodden, *The Story of The Sherborne Pageant*, Sherborne, 1906.)

その後のパジェントでも、開催都市と「海外の同名都市」を母と娘になぞらえてそれぞれを体現する女性が登場する場面がしばしばフィナーレに現れた。パーカーが手がけたパジェントには次のような事例がある。ウォリック・パジェント(1906年)のフィナーレでは、特別な衣装をまとって植民地とアメリカ合衆国に存在する一四のウォリックを体現する少女たちが登場した。ドーヴァー・パジェント(1908年)では、開催地である「母」ドーヴァーの前にアメリカ合衆国や帝国植民地から集まった「娘」として四四のドーヴァーがフィナーレで勢揃いした。ヨーク・パジェント(1909年)でも、ヨークとニューヨークが最前列で手を取り合い、その後景に植民地やアメリカ合衆国に存在する16のヨークがそれぞれバナーを掲げて集まるシーンが創り出された。また、ラッセルズがマスターを務めたバース・パジェント(1909年)にも、本国のバースを擬人化した「レディ・バース」が中央の玉座に位置し、カナダとアメリカ合衆国の「娘たち」(=各地のバースの町)を迎える場面があった。

当時のパジェント・マスターたちの理念(それを表明する言説)のなかにも、しばしば「帝国」が別の姿で現れた。たとえばパーカーは、パジェントをとおして表明され醸成される愛郷心 patriotism について、「真の愛郷心とは、家庭の団らん、町、州、イングランド、帝国を理解して愛するものである」と語った(拙稿(2009年))。ラッセルズ、パーカーとともに多くのパジェントをてがけたフランク・ベンソンも、ワイト島パジェント(1907年)の半年前に開催地で行った講演で次のように語った。「私はカリブルック城(ワイト島パジェントの会場予定地=訳注)に行ってみた。そこで城壁をぐるりと見回し、過去の記憶 我らが帝国を現在のような姿に築きあげた営為の記憶 をたくさん思い起こした。・・・現代生活のストレスの中で、我々はともすれば今ある帝国を築くために先人が果たした役割を忘れがちである。今こそ、その物語を思い起こそうではないか!」(拙稿(2007年))

このほか、ドーヴァーのように、イベントのパトロンとして、ナタール、ニュー・サウス・ウェールズ、ヴィクトリア、南オーストラリア、タスマニア、西オーストラリアの各自治領代表が名を連ねるパジェントもみ

られた。直接的な形で、すなわち帝国の歴史を描く場面がふんだんに登場するようなパジェントは、第一次世界大戦までのイギリス本国にあつては、クリスタル・パレスでのロンドン・パジェント Pageant of London(1911年)のほかには類例をみない。同パジェントを手がけたラッセルズによるロンドンや帝国植民地におけるパジェントのような顕著な事例を別にして、「帝国」の存在とその表象がパジェントという地域イベントのなかで重要な意味をもっていたことは、以上のとおり、明らかである。

(4) 結論ならびに成果としての今後の課題

20世紀初頭のイングランドにおけるパジェントという地域イベントの流行は、イギリス社会の多様な構造と力学を背景としつつ、研究開始当初に想定していた以上に社会にさまざまなインパクトを与えたであろうブームであったことが明らかになった。「イングランド史」を意識した構成をとりつつも、パジェントの内容はあくまで「地元の歴史」が主体であったことと、主催者にもことさらに意識された帝国の表象や帝国との関係性があったことを考え合わせると、パジェント・ブームを「イングリッシュネス」に直結させるような先行研究での議論は必ずしも当を得ていない。当時の都市社会のガヴァナンスとイベントの関係性をふまえたうえで、そこでの「帝国」の表象のありかたやイベントの理念にかかる帝国のありようを明らかにしたことは、本国社会と帝国との間のさまざまな次元での多面的な相互関係の一端に迫ることができたという点で、これまでのパジェントに関する近代イギリス史研究にはなかった、本研究の所期の目的にも適う成果であった。それらをより詳細に解明し、説得的に議論していくためには、さらに多くのパジェントあるいは他の地域イベントの事例をも参照し分析していくことが求められる。今後、研究を展開していくうえでの課題が明確化したことも、重要な成果のひとつである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

川本真浩「パジェント・ブームにみる地方都市と地域イベント ドーヴァー・パジェント(一九〇八年)の事例から」『海南史学』第47号、2009年、投稿中(掲載確定) 査読有。

川本真浩「地域イベントとしての「パジェント」の流行 二〇世紀初頭イングランド

の事例から」『人文科学研究』第14号、
2007年、一 - 二二頁、査読無。

6 . 研究組織

(1)研究代表者

川本 真浩 (KAWAMOTO MASAHIRO)

高知大学教育研究部人文社会科学系・准教授

研究者番号：20314338

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし